

## SY2-1

## 不登校の研究と臨床

小林 正幸

東京学芸大学教育実践研究支援センター

## 1. 不登校予防：学校環境へのアプローチが中心である

(1) 不登校はなぜ生じるのか—不登校は学校環境での不快な体験から始まる。

文部科学省が2回にわたって実施した不登校の予後調査（文部科学省;2001、2014）によれば、「不登校のきっかけのほとんどは、学校環境の中での不快な体験による」。それは、5年経過しても、9割の不登校体験者が覚えているほどの不快な体験である。

(2) 不登校予防による不登校減少の成果

筆者は、不登校の未然防止や早期発見・対応につい3割～5割減少させた。それは、小中連携支援シートシステムと呼ぶもので、市町や学校単位で学校環境に働きかけ、不登校を減少させるものであった。

## 2. 不登校の臨床：

(1) 不登校はなぜ続くのか—不登校の維持要因から見た不登校問題の解決

一方、予後調査によれば、「欠席状況は連鎖状に関連するが、初期状態が現在を規定しないし、現状から将来を予測できない」ことが明らかであり、不登校は続きやすいが、状況依存的である（文部科学省；2001、2014）。

## 2. 不登校の臨床の課題

不登校問題の解消では、筆者が運営に関わる NPO法人元気プログラム作成委員会が挑戦する学校への適応プログラムを紹介する。そこでは、状況に変化を与えるために、子どもを巡る環境に、総合的にアプローチをしている。子どもを巡る環境とは、家庭環境、子ども自身への支援者の教育環境、そして、迎え入れる学校・社会環境であり、そこに総合的にアプローチする。そこへのアプローチとは、調整ではなく、協働であり、協働ができるようにそれぞれの環境を耕すことが最重要と、筆者は考え実践を行っている。

## 【参考文献】

※森田洋司（代表）・池島徳大・川崎克哲・小林正幸・島和博・相馬誠一・滝充・牟田武生・山登敬之 2001 不登校に関する実態調査—平成5年度不登校追跡調査— 文部科学省委託研究

※文部科学省 2014「不登校に関する実態調査」～平成18年度不登校生徒に関する追跡調査報告書～

※小林 正幸（監）・早川 恵子（編）・副島 賢和（編）・大熊 雅士（編） 2009

学校でしかできない不登校支援と未然防止—個別支援シートを用いたサポートシステムの構築。東洋館出版